

早稲田大学大学院文学研究科  
博士学位申請論文審査報告要旨

|       |  |
|-------|--|
| 申請者氏名 | 辻 佐保子  |
| 学位の種類 | 博士(文学)   |
| 論文題目  | ベティ・コムデンとアドルフ・グリーン作品における攪乱の劇作法<br>——ラジオ、テレビ、そして舞台ミュージカルの交錯—— |

審査要旨

本博士学位申請論文は、1940年代から60年代半ばまでのブロードウェイ黄金期に、ミュージカル作家として知られるベティ・コムデン (Betty Comden) とアドルフ・グリーン (Adolph Green) (以下「コムデン&グリーン」) のドラマトゥルギーがいかにかに生成され展開していったかを明らかにするものである。コムデン&グリーンは、従来はスター中心主義的なミュージカル・コメディの作家としてミュージカル研究の周縁に置かれ、そのドラマトゥルギーや作品構造が本格的に論じられることはほとんどなかった。それに対し本論文では、これまで看過されてきた、彼らのラジオやテレビにおける作品群に着目し、そうした他メディアでの経験が彼らのドラマトゥルギーの生成に多大な影響を与えたことを明らかにした。そして、コムデン&グリーンが、台詞、歌、ダンスの〈統合〉を理念とする当時のミュージカルの方法論を志向しつつも、同時に、多様なメディアでの経験から獲得した、〈統合〉に向かう作品構造を攪乱し、〈統合〉から逸脱する手法を駆使することで、〈統合〉の規範に収まらない独自の作品世界を創造していたことを論証した。

本論文は第1部「雑多な音、声、音楽の劇的機能——ラジオと舞台とミュージカルの交錯」、第2部「ラジオの残響——舞台ミュージカルにおける劇作法の展開」、第3部「身体への射程の転換——テレビと舞台ミュージカルの交錯」からなる。

第1部第1章「破調のメディウムとしてのラジオと、「切断的音声の挿入」——『ファン・ウィズ・ザ・レビューーズ』』では、1940年にNBCで放送されたラジオ・コメディ『ファン・ウィズ・ザ・レビューーズ』において、脈絡に欠ける音声表現の挿入が、番組内容とヴァリエティ形式、ラジオという媒体の三つにおいて、いずれも統一的で安定した秩序を攪乱し、混淆的な状態を生起させる機能を果たしていることを分析した。第1部第2章「反復と「雑談」、錯綜する時間秩序——『オン・ザ・タウン』』では、ブロードウェイ・デビュー作である『オン・ザ・タウン』にラジオ作品で開拓した「切断的音声の挿入」の手法が見られることを検証し、同作がその発展的な変奏として捉えられることを論証した。

第2部第3章「裂け目としての号外場面と、カオスと化す作品世界——『ビリオン・ダラー・ベイビー』』では、二作目の舞台作品『ビリオン・ダラー・ベイビー』を取り上げ、従来の研究では看過されてきた、新聞の売り子が号外の見出しを叫ぶ挿話が「切断的音声の挿入」として捉えられ、一定の劇的機能を有していることを指摘した。第2部第4章「主体に亀裂を穿ち、演技を喚起する電話——『ベルがなっている』』では、表層のかつ遊戯的な演技を喚起し、主体に楔を打ち込み複数化する機械としての電話を「切断的音声の挿入」の延長上に捉え、『ベルがなっている』においてヒロイン自身がメディア化していく過程を分析した。

第3部第5章「破壊的振る舞いをめぐる身体とテレビの関係——『いつも上天気』』では、ミュージカル映画『いつも上天気』終盤で描かれる、生放送ヴァリエティ番組『マダリンとの夜』の収録シーンを取り上げ、秩序や規範を踏み越える身体の奔放さとメディウムとが緊密な関係を結んでいたテレビの原初的なありように立脚した表現が試みられていることを明らかにした。第3部第6章「過激な身体と、現在進行形で生成されるテレビ——「当代のカルチャー」、「ベルとのタベ」、『もうすぐ結婚』』では、コムデン&グリーンが手がけてたテレビ番組3作品に、『いつも上天気』に通じる規範や秩序を踏み越える過激な身体が登場することを指摘し、録画が主流となる1960年代という状況においてテレビのライブの感覚を喚起する仕掛けとして意義を有していたことを論じた。第3部第7章「テレビを取りこむことによるミュージカル表現の拡張——『フェイド・アウト——フェイド・イン』』

では、身体を張ったコミカルな描写の中に、コムデン&グリーンテレビ作品に通じる過激さを看取り、映画スタジオにおいてなされる身体統制を跳ね除け、異質で攪乱的でユニークな存在として主人公を描き出すためにテレビ的身体表象が機能していることを明らかにした。

2024年1月29日に開催された公開審査会では、豊富な文献調査と精緻な作品分析に基づいた重厚な論であること、コムデン&グリーン忘れ去られていたラジオ作品を発掘しその価値を指摘したこと、これまで看過されてきたラジオやテレビ作品がミュージカル作品に与えた影響を明らかにしたこと、彼らの作品が〈統合〉への志向とそこからの逸脱という相反するベクトルにより成立していることを論証したこと、そしてそれらにより、ミュージカル作家としてのコムデン&グリーンを再評価したことが高く評価された。

課題としては、ラジオをめぐる「存在論的不確定性」が若干曖昧であること、演技する『主体』が作中で仮構されたものであるにもかかわらず、時に内発的自意識を備えた主体であるように読み取れる記述があること、同時代演劇やヨーロッパ文化からの影響への言及が不足していること、コムデン&グリーン「笑い」の記述が充分ではないことなどが指摘された。

しかしながら、本論文の功績はそうした課題をはるかに凌ぐものである。本論文は、これまでスター主義的なウェルメイドの作家としてミュージカル研究において等閑視されてきたコムデン&グリーンを間違いなく再評価するものであり、今後の世界的なコムデン&グリーン研究に一石を投じるにとどまらず、ブロードウェイのミュージカル史研究の発展に寄与するものである。よって、審査委員会は全員一致で、本論文を博士学位にふさわしい論文であると判断した。

|        |              |
|--------|--------------|
| 審査会開催日 | 2024年 1月 29日 |
|--------|--------------|

| 審査委員資格 | 所属機関名称・資格 | 氏名     | 専門分野        | 博士学位                 |
|--------|-----------|--------|-------------|----------------------|
| 主任審査委員 | 早稲田大学・教授  | 岡室 美奈子 | 現代演劇、テレビ文化論 | 文学博士(国立アイランド大学ダブリン校) |
| 審査委員   | 早稲田大学・教授  | 長谷 正人  | 映像文化論       |                      |
| 審査委員   | 青山学院大学・教授 | 外岡 尚美  | アメリカ現代演劇    | 文学博士(ハワイ大学)          |
| 審査委員   | 神戸大学・教授   | 大田 美佐子 | 音楽文化史・音楽美学  | 音楽学博士(ウィーン大学)        |
| 審査委員   |           |        |             |                      |